

20年間の学生の奮闘により構築された生物資源管理学科の個性

上町 達也

生物資源管理学科

今年(2016年)の3月に第18期生が卒業を迎えた。生物資源管理学科は1学年約60人なので、創立から数えて1000人を超える学生が巣立っていったことになる。街で偶然に卒業生に出会う機会も年を追うごとに多くなり、出張において東京駅で乗り換えをしているときに会ったり、日曜日に魚釣りに行った時に福井県の釣り道具屋で会ったりしたこともある。この1000人を超える生物資源管理学科卒業生の奮闘のおかげで、学科全体でのイベントが多い、学生と教員の距離が近い、といった学科の個性・伝統が構築された。

本学科では節目ごとに新歓、忘年会、新年会などのイベントが開催されるが、これらはいずれも学生自らが企画し、準備、後片付けまでを行う。4月に行われる新歓は、生物資源管理学科独特の伝統的なイベントであり、おそらく全ての卒業生の記憶に残っているであろう。新歓は圃場実験施設で行われるバーベキューであるが、2回生または3回生が主体となって準備する。彼らの大半にとって、たくさんの人が参加するイベントを企画するのは初めてであり、予算の見積もり、会費の設定・徴収、出欠の確認、食材や炭などの買い出し、当日の役割分担、後片付けなど、幾多の試練を乗り越えなければならない。各教員の研究室を廻って、会費を徴収するのも最初は緊張したことと思う。忘年会・新年会の頃になると、緊張した様子もなく「僕たちへの愛情の大きさの分だけお金を出してください」とか「先生の懐(器)の大きさを金額で示してください」など、困らせることを言う学生も現れるようになるのではあるが……。新歓では、夕方ごろ7～10台のバーベキューコンロが設置され、炭に火をつけるのであるが、なかなか火がつかず苦しんだ学年が多かったように思う。会が始まって早々に肉が無くなってしまった年や、雨の中でバーベキューを行った年もあった。学科長が開会の挨拶をする時はまだ明るかった会場もすぐに闇に覆われ、設置された投光器の明かりを頼りに、十数人の学生と教員が一つのコンロを囲んでバーベキューをする。投光器の光量は甚だ心許ないため、肉がよく焼けているのか今ひとつわからない場合が多いが、網の上に置かれた肉はすぐに学生達の餌食となり無くなってしまう。高校を卒業したばかりの新入生にとって、真っ暗な中でバーベキューコンロを囲みながら、教員、先輩、同級生と大学生活、研究、

趣味など様々な話をするこの体験は、強く印象に残ったのではないだろうか。

学科の忘年会はキムチ鍋や寄せ鍋など何種類かの鍋を囲む、全学年を対象としたイベントであることが多いのに対し、新年会は2回生と教員の懇親会であり、2回生が分属する研究室を決める一助とする目的のイベントである場合が多い。しかしこのようなスタイルに落ち着くまでにも若干の紆余曲折があり、忘年会の代わりにクリスマスパーティーを行っていた時期もあった。クリスマスパーティーではビンゴ大会が毎回行われていたが、会を主催する交流委員の学生の依頼により、各教員はあらかじめビンゴ大会の賞品となるクリスマスプレゼントを準備しなければならなかった。教員が知恵を絞って?提供した賞品は、図書券、ワイン、Tシャツやちょっとした小物など様々であった。賞品の中には教科書などもあり、日頃の講義に臨む姿勢から考えると教科書など読みそうにないように見える学生がビンゴで教科書を引き当てると、笑いが起こっていた。

新歓をはじめとするこれらの催しものの多くは、1期生が最初に立ち上げたものである。自分たちしか学生がいない新しい大学の中で、少しでも楽しく充実したキャンパスライフを送るために、彼らは自らの手で部やサークルを立ち上げるとともに、学科の伝統的な催しものとなる様々なイベントを次々と考えだし、行ってきた。教員とともに野球やバレーボールなどの球技大会を行ったこともあった。バイタリティー溢れる彼らの行動力は決して入学当初から備わっていたわけではなく、自ら道を切り拓きながらキャンパスライフを過ごす中で育まれたものである。1期生が入学してきたとき28歳であった私が今年50歳になることから考えると、1期生達の多くは今年40歳になるはずである。滋賀県立大学で育まれたバイタリティーを発揮し、仕事に、家庭に頑張っていることであろう。もう数年もすると、1期生や2期生の子供が滋賀県立大学に入学してくる可能性があり、県大生の親となった彼らと再会するのはとても楽しみである。

昨年(2015年)の6月に開学20周年記念式典が開催され、午後から環境科学部の20周年パーティーとして、圃場実験施設でバーベキューが行われた(写真1)。1期生から17期生まで多くの生物資源管理学科の卒業生が参加し、中には家族連れで来てくれた卒

業生も何組かいた。開学して20年あまりの月日が経過し、社会に羽ばたいていった卒業生達はそれぞれ様々な経験をし、多くの苦勞を乗り越えてきたことであろう。しかし1期生を始めとするいずれの卒業生達も、教員や同級生と楽しそうに話をするその様子は、学生の頃と少しも変わっていないように感じられた。彼らが一瞬で学生の頃の感覚に戻ったのは、久しぶりに同級生に再会したことや、新歓と同様の圃場実験施設でのバーベキューというシチュエーションであることとともに、彼らが築き上げた「学生と教員の距離が近い」という学科の特徴・伝統によるところも大きいのではないかとと思われる。

湖岸道路から、本学の正面に続く道路の両側にはケヤキ並木が、更にその外側にはサクラ並木がある(写真2、3)。開学当初は、ちゃんと根付いて育つか不安になるぐらいに弱々しい若木であった。しかし20年を経過した今、季節ごとに鮮やかに色を変えるケヤキは、大学近辺の方々が木陰でくつろぎに来られるぐらいに立派に育ち、サクラは入学式の頃に合わせて見事な花を咲かせてくれている。これらの樹木と同様に、滋賀県立大学、更には環境科学部、生物資源管理学科も、最初のまっさらの状態から、現在の個性的で存在感のある大学、学部、学科に発展してきた。これは、すでに退職された多くの教職員や、本学を暖かく見守ってくださった地域の方々、滋賀県や彦根市などの関係者によるところが大きいとともに、大学、学科の個性や伝統を築き上げてきた卒業生達の努力と熱意の成果でもある。しかし一方で、創立100年以上経過した諸大学から見れば、本学は開学から20年しか経過していない、まだまだ発展途上の大学であることも事実である。激しい時代の変化に対応しながらも、卒業生達とともに築き上げてきた大学、学部、学科の個性、伝統を今後、更に発展させていかなければならない。



写真1：環境科学部20周年記念パーティー
(圃場実験施設でのバーベキュー)



写真2：滋賀県立大学正面のケヤキ並木



写真3：滋賀県立大学正面のサクラ並木